

令和4年度(2022年度) 外国語科教育に関する研究

児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する 小学校外国語科における言語活動の充実

ーバックワード・デザインによる単元構想とICTの効果的な活用を通してー

内容の要約

本研究では、指導者が、「新滋賀県モデル『CAN - DOリスト』」の学習到達目標につながる単元の目標を定め、目的や場面、状況等に応じた言語活動を設定し、バックワード・デザインによる単元構想を行った。また、児童が、ICTの効果的な活用を通して、自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する姿を目指した。さらに、児童が家庭学習等で学習活動を選択したり考えたりして外国語に慣れ親しむことができるよう「英語マスターシート」を作成し、活用した。これらのことにより、児童の言語活動が充実し、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力が育成された。

キーワード

「新滋賀県モデル『CAN - DOリスト』」 言語活動 バックワード・デザイン
自らの学習の状況を把握 主体的に学習を調整する 「英語マスターシート」

目 次

I 主題設定の理由	(1)	V 研究の進め方	(5)
II 研究の目標	(1)	1 研究の方法	(5)
III 研究の仮説	(2)	2 研究の経過	(5)
IV 研究についての基本的な考え方	(2)	VI 研究の内容とその成果	(6)
1 「自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する」姿とは	(2)	1 バックワード・デザインによる単元構想(「Let's go to Italy.」第6学年)	(6)
2 バックワード・デザインによる単元構想	(2)	2 自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する言語活動の実際	(7)
3 自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する言語活動	(3)	3 児童の学びの変容	(10)
4 コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成に向けて	(5)	VII 研究のまとめと今後の課題	(12)
		1 研究のまとめ	(12)
		2 今後の課題	(12)
		文 献	

滋賀県総合教育センター

中 川 絵 美

小学校
外国語科の目標

コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成



授業実践

研究の背景

学級担任や英語専科指導教員をはじめとする全ての小学校教員は、外国語科における指導力の向上が求められる

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」(令和3年1月)

教科担任制

小学校高学年から導入する

「個別最適な学び」

自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する

「協働的な学び」

他者と協働しながら一人ひとりのよい点を生かす

ICTの活用

自ら学び直しや発展的な学習を行いやすくなる

外国語科教育に関する研究

児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する 小学校外国語科における言語活動の充実

ーバックワード・デザインによる単元構想とICTの効果的な活用を通してー

I 主 題 設 定 の 理 由

小学校学習指導要領(平成29年告示)(以下、学習指導要領という。)では、小学校外国語科の目標として、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指す¹⁾と示されている。また、言語活動について「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」(平成29年 文部科学省)(以下、「研修ガイドブック」という。)では、「学習指導要領の外国語活動や外国語科においては、言語活動は、『実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う』活動を意味する」¹⁾と定義されている。そのため、児童の興味・関心や学習特性等をよく理解している学級担任が果たす役割がかねてより重視されていたところである。一方、中央教育審議会における「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)」(令和3年1月)(以下、令和3年答申という。)では、教科指導の専門性をもった教員による指導を充実させるために「小学校高学年からの教科担任制を(令和4(2022)年を目途に)本格的に導入する必要がある」²⁾と示されている。これらのことから、学級担任や小学校英語専科指導教員(以下、専科指導教員という。)をはじめとする全ての小学校教員は、それぞれの強みを生かして、外国語科における指導力を向上させることが求められている。

また、令和3年答申では、「個別最適な学び」について「これからの学校においては、子供が『個別最適な学び』を進められるよう、教師が専門職としての知見を活用し、子供の実態に応じて、(中略)子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる」「子供がICTを日常的に活用することにより、自ら見通しを立てたり、学習の状況を把握し、新たな学習方法を見いだしたり、自ら学び直しや発展的な学習を行いやすくなったりする等の効果が生まれることが期待される」²⁾と示されている。さらに、一人ひとりの学びが、孤立した学びに陥ったり、集団の中で個が埋没したりしてしまうことがないように、児童同士であるいは多様な他者と協働しながら、児童一人ひとりのよい点や可能性を生かした「協働的な学び」を充実することの重要性も指摘されている。

そこで、本研究では、指導者が一人ひとりの児童の学習状況を適切に把握するだけでなく、児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する言語活動になるよう、バックワード・デザイン¹⁾により単元を構想し、ICTを効果的に活用した授業を実践する。指導者がコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じた言語活動を充実させることで、児童一人ひとりのコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力が育成され则认为、本主題を設定した。

II 研 究 の 目 標

バックワード・デザインにより単元を構想し、ICTを効果的に活用することで、児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができる言語活動の充実を図り、児童一人ひとりのコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成を目指す。

¹⁾ バックワード・デザインは、「研修ガイドブック」において、単元の終末で目指す児童の具体的な姿を明確にし、そこから逆算して1時間ごとの目標を定め、活動を組み立てながら単元を構成していくことであると示されている。

Ⅲ 研究の仮説

指導者は、「新滋賀県モデル『CAN-DOリスト』」の学習到達目標につながる単元の目標を設定したうえでバックワード・デザインによる単元構想を行い、ICTの効果的な活用を通して、児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する言語活動を充実させれば、児童一人ひとりのコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力が育成されるであろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 「自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する」姿とは

本研究では、児童が「自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する」姿を、「学習の目標に向けて知識や技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習の進め方について試行錯誤する」姿と捉える。「外国語を使って何ができるようになるか」を児童が自覚し、自らの課題解決に向けて学習課題や学習活動を選択したり試行錯誤したりする場を設けることで、児童が主体的に学習を調整する言語活動の充実につなげる。

2 バックワード・デザインによる単元構想

指導者は、各単元の終末で目指す児童の姿を明確にし、その姿に到達するために、バックワード・デザインにより1時間ごとの目標を定めて指導の流れを考え、単元を構想する(図1)。

本研究で単元の中心となる言語活動とは、単元の終末に行う言語活動のこととする。単元の中心となる言語活動は、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じた内容を設定する。その際、児童の興味・関心のある題材や児童にとって必然性のある活動になるようにする。

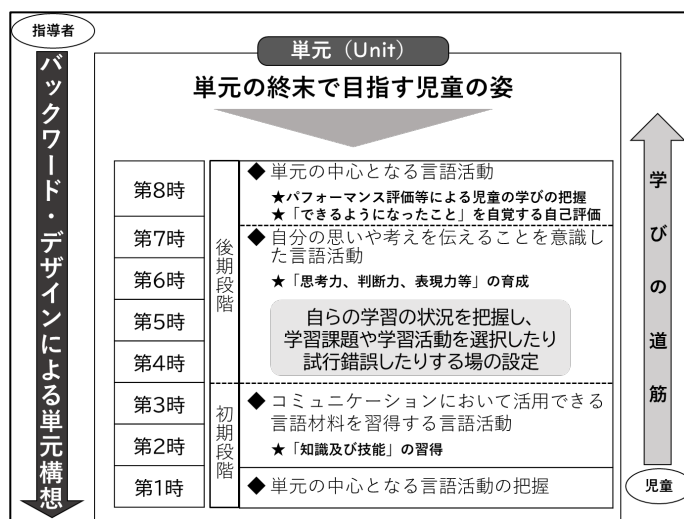


図1 本研究におけるバックワード・デザインによる単元構想

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編(以下、学習指導要領解説という。)では、「単元又は1単位時間の初期段階で言語活動を通して学習内容として設定されている表現の音声を読み聞いたり話したりするなど、英語の音声に慣れ親しませる活動を展開し、言語の意味や働きなどを理解させることが大切である。その上で、後期段階においては、設定された場面の中で、自分の考えや気持ちを互いに伝え合う言語活動を展開するなどの学習過程の工夫が大切である」³⁾と示されている。このことから、単元の初期段階において、単元の中心となる言語活動を把握することで学習の見通しをもち、必要な言語材料¹⁾の習得を目指す。単元の後期段階において、児童が自らの学習の状況を把握し、課題解決に向けて学習課題や学習活動を選択したり試行錯誤したりする場を設けることで、思考力、判断力、表現力等を一体的に育成し主体的に学習を調整する姿を目指す。単元の終末では、児童が単元の目標と照らし合わせて自己評価をすることで、「できるようになったこと」を自覚できるようにする。指導者は、児童の学びを把握し、次の指導の改善に生かすことが重要となる。

¹⁾ 言語材料とは、当該単元で扱う表現(児童の発話)と語彙(児童が使う語彙)のことを示す。

(1) 「新滋賀県モデル『CAN-DOリスト』」の活用

学習指導要領解説では、「今回の改訂で領域別の目標が明確に示されたことにより、その目標と関連付けられた学年ごとの『学習到達目標』を各学校において設定する必要がある」³⁾と示されている。設定する際の参考として、本県では、「新滋賀県モデル『CAN-DOリスト』」(平成30年)(以下、「CAN-DOリスト」という。)が作成されている。学習指導要領における小学校外国語科の目標と「CAN-DOリスト」との関係を図2に示す。「CAN-DOリスト」は、聞くこと、読むこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]、書くことの五つの領域別に、レベル1～2を小学校、レベル3～5を中学校、レベル6～11を高等学校と想定し、作成されている。指導者は、一貫性のある学習到達目標を意識することで、継続的・系統的に指導と評価を行うことができる。「CAN-DOリスト」は、「『CAN-DOリスト』リーフレット」として令和4年3月に県内全小・中・高等学校に配付され、滋賀県教育委員会のホームページにも掲載されている。研究協力校の実態を踏まえて、本研究では、「CAN-DOリスト」を活用して学習到達目標につながる単元の目標を設定する。また、指導者と児童が「CAN-DOリスト」を共有することで、児童は「何ができるようになるか」が明確になり、自らが目標を焦点化し主体的に学習を進めることができる。

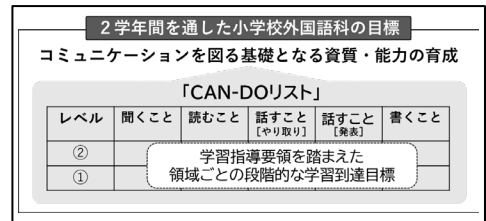


図2 小学校外国語科の目標と「CAN-DOリスト」との関係

(2) 単元の目標を共有するモデル動画付きルーブリックの活用

指導者が、児童にとって必然性のある単元の目標を設定したり、目標を達成するための方法を計画したりすることで、児童が「もっと学びたい」「自分のことを伝えたい」といった思いをもてるような言語活動を実現することができる。

そこで本研究では、指導者が、ルーブリック(図3)を作成し、「CAN-DOリスト」を活用して設定した単元の目標を、単元の第1時で児童と共有する。ルーブリックは、専科指導教員、学級担任、外国語指導助手(Assistant Language Teacher)(以下、ALTという。)の間でも共有することで指導に生かす。ルーブリックは、1人1台端末に保存して、児童がいつでも確認できるようにしておく。



図3 児童と共有するルーブリック

また、ALTや指導者が、ルーブリックに基づいた単元の中心となる言語活動をモデル動画として作成し、1人1台端末に保存しておく。「おおむね満足できる」状況と判断される姿と「十分満足できる」状況と判断される姿を分けてモデル動画として保存しておくことで、児童は、必要に応じて何度でも言語活動のモデル動画を見返すことができ、自分の目指す姿を明確にすることができる。

3 自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する言語活動

(1) ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

令和3年答申では、「学力の確実な定着等の資質・能力の育成に向けた方策」として、児童の学力の確実な定着について検討するにあたっては、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力をバランスよく育成することが必要であると示されている。加えて、学習指導要領を着実に実施するにあたっては、GIGAスクール構想により整備されたICTを最大限活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが重要であると示されている。

本研究では、1人1台端末を含むICTを効果的に活用し、児童の言語活動の充実を図る。例えば、

児童が自分の言語活動の様子を録画機能で記録し、その記録を確認する。自らの学習の状況を客観的に把握し、必要な学びを選択するなどして学習を調整することで、学習を深め、広げる「個別最適な学び」(図4)を進める。また、記録したものについて、友達と相互評価をして学び合ったり、指導者やALTと関わり合ったりすることでよりよい学びを生み出す「協働的な学び」(図4)にもつながる。自らの学習の状況を把握したり、友達や指導者、ALTとの学びを通して自分の伝えたいことが表現できた喜びや満足感を得たりすることで、外国語を用いて他者とコミュニケーションを図ろうとする態度にもつながるだろう。ICTを効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に充実すれば、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成に資することができると思う。

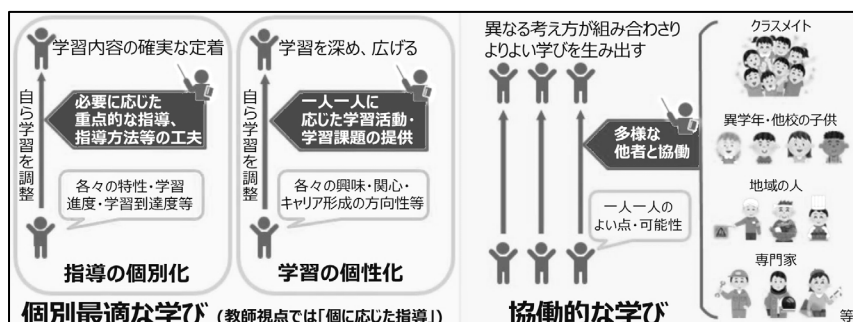


図4 文部科学省「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実(イメージ)」より(一部)

(2) 情報を整理しながら自分の考えなどを形成し、再構築するための1人1台端末の活用

英語で自分の考えや気持ちを表現し伝え合うためには、児童がコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、適切な言語材料を活用し、思考・判断して情報を整理するとともに、自分の考えなどを形成、再構築することが重要である。その際、音声情報を保存できる1人1台端末の活用は児童の学習にとって効果的である。例えば、ALTが既習の表現を録音しておくことで、児童が必要に応じて表現を振り返ったり、繰り返し音声を聞いたりすることが可能となり、既習の内容が定着する。また、未習であっても児童が必要なときに知りたい語句や文、外国の文化などを検索することも可能となり、外国語やその背景にある文化を主体的に学ぶことにつながる。さらに、教科書の二次元コードや学習者用デジタル教科書を活用して、必要に応じた題材を選択することで「学習の個性化」(図4)が図られ、学習を深め、広げることができる。これらのことから、児童が1人1台端末を日常的に活用することで、自分の考えなどを形成したり、再構築したりすることができ、主体的に学習を調整しながら言語活動に取り組むことができる。

(3) 主体的に学習を調整する姿を目指す「英語マスターシート」の活用

学習指導要領解説では、「言語習得の特性から、基本的な語句や表現などは、場面や活動などを替えながら、繰り返し学習させることで定着を図ることが期待される」³⁾とし、「10分から15分の短時間学習の実施」³⁾等による指導の工夫が示されている。そこで、家庭学習や短時間学習で、児童が自分の課題に合った学習に取り組んだり、1人1台端末を活用して単元の目標に向けて基本的な語句や表現などを習得するために繰り返し学習したりすることができるよう促す。

そのため、本研究では、主体的に学習を調整する姿を目指し、「英語マスターシート」(図5)を作成し、活用する。このシートは、単元ごとで1枚のビンゴ形式のシートになっており、五つの領域の学習内容を示す。既習表現を含めた単

A master of English!		
■Unit3の学習が終わるまでに、BINGOを目指そう!!		
■学校で取り組んでも、家で取り組んでもいいです。		Good job!
PD:p.8【食べ物】p.16【国】の単語を声に出して読もう!(QRコードを使うのも可です!) 好きな食べ物は () 先生に聞こう! 行ってみたい国は () 「どこへ行きたいですか?」と先生に聞こう! 「Where do you want to go?」先生は()に行きたい!! Let's Sing! Let's Chant! を聞こう! かもちゃん歌ってみたいよ! (QRコードやCDを使って) □楽しく聞いた! □楽しく歌った! できたら check	「好きな○○○○は何ですか?」と先生に聞こう! 「What do you like?」先生は() Unit3の目標にむけて、どんなことができるかな? [例] 発表の練習を3回する 家の人に聞いてもらう など 教科書p.3の目標にむけて! 「書くときのルール」を見て、[1]に番号を書こう! 【】の前の英単語は() 【】の後の英単語は() 【】の文の後は() 【】の文の後は() 【】の文の後は() 【】の文の後は() 自分の英語の学習を考えよう!! 得意なことをもっと得意にするために... 苦手なことをもっと得意にするために... できたら check	

図5 第6学年Unit3「英語マスターシート」

元に関連する言語材料を用いることで、単元で扱う表現に親しむことができる。児童が自分の興味・関心や課題に合った問題から取り組むことができ、自分のための学習を考える欄や単元の目標に向けての学習を考える欄も設ける。全ての項目を達成した児童、または、自分で考えて取り組みたい児童のために、裏面に自由に項目を考えることができるシートも準備しておく。このように、「英語マスターシート」を活用し、児童が家庭学習や短時間学習で自らの学習の状況に応じて問題を選択したり考えたりして英語に慣れ親しむことができるような環境を整えることで、主体的に学習を調整する姿を目指す。

4 コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成に向けて

研究の始期と終期には児童質問紙調査を実施し、本研究での言語活動の充実がコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成につながったかについて検証する。児童質問紙調査では、言語活動に関する設問や、学びの調整に関する設問等から、変容を追う。

学習指導要領解説では、「外国語学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、児童生徒の学びの過程全体を通じて、知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である」³⁾と示されている。これらのことを踏まえ、児童の言語活動の様子や、ルーブリックに基づいたパフォーマンス評価などから、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成について見取る。その際、指導者は1人1台端末を活用することで、言語活動における児童の学びの過程を記録する。

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 研究協力校における実証授業では、話すこと[やり取り](第5学年)、話すこと[発表](第6学年)の領域に焦点を当てて研究を進める。
- (2) 指導者が単元の目標を設定し、バックワード・デザインによる単元構想を行う。その際には、「CAN-DOリスト」を活用して学習到達目標につながる単元の目標を設定する。
- (3) ICTの効果的な活用を通して、児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する言語活動を設定し、授業実践を行う。また、「英語マスターシート」を活用し、家庭学習や短時間学習で、英語に慣れ親しむことができるよう促す。
- (4) 1人1台端末に録画・録音されている言語活動の様子や、ルーブリックに基づいたパフォーマンス評価、児童質問紙調査の結果などを基に、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力が育成されたかを分析する。

2 研究の経過

4月	研究構想、研究委員の委嘱	9月～11月	研究協力校での実証授業Ⅱ
5月	研究推進計画の立案	11月	児童・指導者質問紙調査(第2回)
6月	第1回専門・研究委員会 児童・指導者質問紙調査(第1回)	11月～12月	第3回専門・研究委員会 研究論文原稿執筆
6月～7月	研究協力校での実証授業Ⅰ	1月	研究発表準備
8月	第2回専門・研究委員会	2月	研究発表大会
		3月	研究のまとめ

VI 研究の内容とその成果

1 バックワード・デザインによる単元構想(「Let's go to Italy.」第6学年)

本研究では、Unit 3「What do you want to study?」Unit 5「Where is the post office?」(第5学年)、Unit 3「Let's go to Italy.」Unit 5「We all live on the Earth.」(第6学年)の単元において実証授業を行った。ここでは、第6学年 Unit 3「Let's go to Italy.」の事例を基に、バックワード・デザインにより単元を構想した流れを示す(図6)。

まず、指導者は、本単元の終末で目指す児童の姿を「おすすめの国や地域とその理由などについて、自分の考えや気持ちを含めて話すことができる」とした。そこで、本単元を中心となる言語活動を「ALTや友達に世界の国々のよさを伝えるために、おすすめの国や地域とその理由について紹介し合い、ナンバーワンツアーコンダクターを決めよう」と設定した。発表者は、おすすめの国や地域とその理由などについて発表し、聞き手である児童は「この国に行ってみたい」と思った発表を投票で決めるという単元を中心となる言語活動である。本単元では、第7時で単元を中心となる言語活動の発表場面を設定した。

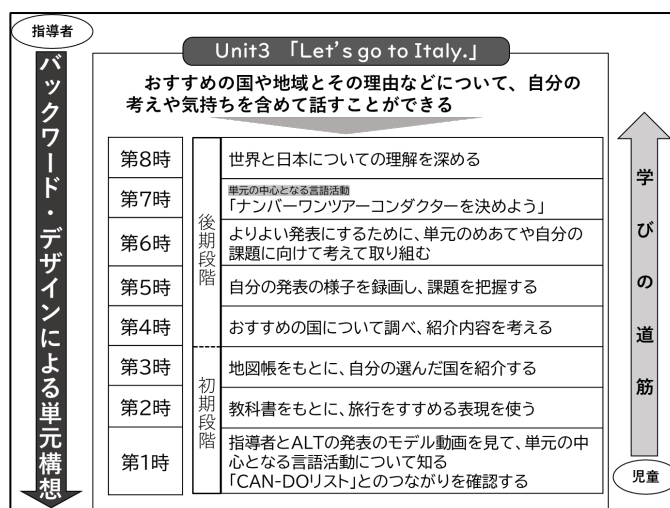


図6 第6学年 Unit 3 バックワード・デザインによる単元構想

次に、指導者は、児童が国の魅力を伝えるためには、おすすめの国について英語で伝えるための基本的な知識や技能を習得したうえで、表情、ジェスチャー、話すスピード、間や聞き手への問いかけなどについて思考・判断・表現を繰り返すことが必要であると考えた。そのため、第6時では、児童が自分の発表の課題を見つけてよりよい発表にするために試行錯誤する場面を設けた。第5時では、発表の様子を端末で録画し、自らの学習の状況を把握することで課題を見つける言語活動を行うこととした。第4時では、発表に向けて資料や1人1台端末を使って調べ学習を行い、自分が伝えたいことをスライドにまとめ、英語の表現を考える言語活動を設定した。

そのうえで、指導者は、第2・3時で、教科書や社会科で使用している地図帳を基に、基本的な言語材料を習得する言語活動を設定した。導入となる第1時では、指導者とALTが単元を中心となる言語活動のモデルを示す場面を設定することで、「何ができるようになるか」を児童と共有し、テーマに対する興味を高めるようにした。

また、指導者は、本単元の導入時に、単元を中心となる言語活動では、発表を聞いてナンバーワンツアーコンダクターに投票することを児童に伝えていた。そのため、単元を中心となる言語活動では、発表者も聞き手も必然性をもって言語活動に取り組むことができた(図7)。児童aは「聞いている人が、返事してくれたり反応してくれたりして話しやすかった」と振り返りで記述し、多くの児童が相手を意識して発表する言語活動につながった。

このように、指導者が目的や場面、状況等に応じた単元を中心となる言語活動を設定し、バックワード・デザインによる単元構想を行うことで、単元で目指す児童の姿につながる授業となった。



図7 必然性をもって話す児童と聞く児童

(1) 「CAN-DOリスト」の活用による学習到達目標の共有(第6学年)

実証授業における単元の第1時で、指導者は単元の日標を児童に提示し、この単元で学習するこ

とが「CAN-DOリスト」の該当する領域の学習到達目標につながることを共有した。また、学年の掲示板に「CAN-DOリスト」を拡大して掲示し、児童が年間を通じて学習到達目標を意識して外国語を学ぶことができるようにした。さらに、1人1台端末上にも「CAN-DOリスト」を保存することで、児童が必要に応じて確認できるようにした。すると、自主的に1人1台端末を使用して拡大(ピンチアウト)して該当する領域の目標を確認する児童の姿が見られた(図8)。児童bは、「6年生の英語の勉強の目標が分かったのでよかった」と振り返りシートに記述していた。指導者は、「児童が『CAN-DOリスト』を使って現在の自分がどのレベルに当てはまるのかを照らし合わせ、6年生の終わりまでにどんな力が必要なのかを知り、見通しをもって学んでいる姿が見られた。指導者としても単元だけでなく学年の各領域における学習到達目標を見通して授業を考えていくことが必要だと改めて感じた」と述べた。

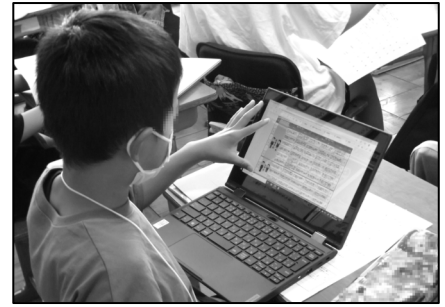


図8 1人1台端末上の「CAN-DOリスト」を拡大して目標を確認する児童

これらのことから、「CAN-DOリスト」を活用することは、児童の学習到達目標に向けて主体的に学ぶ姿や、指導者の指導と評価の一体化につながった。

(2) モデル動画付きループリックの活用(「Where is the post office?」第5学年)

実証授業の各単元において、ループリックを用いて、児童と単元の目標を共有した。ここでは、第5学年 Unit 5 「Where is the post office?」の事例を示す。

単元の初期段階で、ループリック(図9)に基づいた指導者とALTの単元の中心となる言語活動のモデル動画(図10)を示した。このことで、「この単元で何ができるようになるか」が明確になり、児童が「やってみたい」と思う目的や場面、状況等が示された。また、単元が始まるまでに、指導者とALTがモデル動画を録画しておくことで、ALTが不在の場合でも児童に単元の中心となる言語活動の様子や言語材料を示すことができた。モデル動画を1人1台端末に保存しておくことで、児童がいつでも確認できる環境を整えた。学習の過程で児童は必要に応じてモデル動画を確認して英語表現を活用したり、自分の学びの状況と比較したりして、単元の中心となる言語活動に向けて学びを進める様子が見られた。児童cは、「先生とALTの先生のやり取りの動画を見て、単元の最終ゴールの練習ができるからいい」と振り返った。

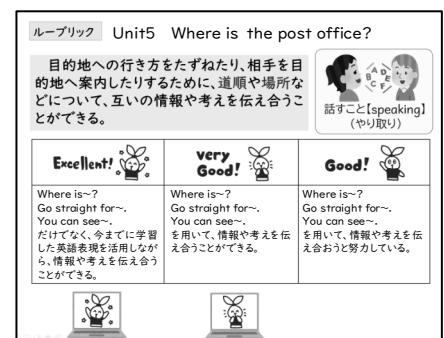


図9 第5学年 Unit5 ループリック



図10 指導者とALTの言語活動のモデル動画の画面

これらのことから、ループリックやモデル動画を活用し、単元の終末で目指す具体的な姿を児童と共有して必要に応じて確認できる環境を整えることで、児童が目標に向けて主体的に学ぶ姿につながった。

2 自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する言語活動の実践

(1) 1人1台端末を活用して自らの学習の状況を把握する姿(第5学年)

第5学年の実証授業では、単元の後期段階でグループの友達と協力し、やり取りの様子を互いに録画した。自らの学びを実感できるよう、単元の中で複数回録画し、動画を1人1台端末に保存した。グループでの録画を終えると、児童は指導者が指示する前に録画した動画を早速確認し、自分

の学習の状況を把握していた(図11)。児童dは「自分の動画を見て、友達は自分の方を見て話してくれているのに、自分は相手のことを全く見ていないことに気付いた」と話し、「次は友達の方を見てやり取りがしたい」と次のめあてにつなげた。

指導者は、授業を振り返り、「動画を何度も見返したり、『もう1回撮りたい』と言って再度録画したりしている児童がいた。これは、何気なくやり取りをして終わりという今までのスタイルとは違って、

自分の姿を客観的に見ることで、改善したいポイントが自分で分かったからだと思われる。また、余裕が出てくると、録画しながら友達の様子をじっくり見てアドバイスできるようになったり、相手のよさに気付いたりすることもあった。手元に動画が残ることで1回目と2回目の動画を比較することもでき、児童は自分の成長を実感することができた」と語った。

これらのことから、1人1台端末を活用して自分の話す様子を録画し、その動画を確認することで、自らの学びを把握したり自らの課題に気付いて次の学習に生かしたりする姿につながった。



図11 自分のやり取りの動画を確認する児童

(2) ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」(第6学年)

ア 言語材料を習得するための「個別最適な学び」

第6学年の実証授業では、言語材料を習得するために、児童が練習方法を選んで発音練習に取り組んだ。

児童eは、ALTが授業支援アプリで録画しておいたスライドを活用して単語の練習を行った。スライドには、発音時の口形も分かるようにALTの表情も映した。画面をタップすると、音声再生されるようになっており、単元で扱う言語材料を全て学ぶことができる。児童eは画面をスワイプして自分が発音できない単語のみALTの発音を確認して練習に取り組んだ(図12)。また児童fは、学習者用デジタル教科書を継続的に活用して単語練習に取り組んだ。学習者用デジタル教科書の書き込み機能を活用して単語を隠し(図13)、イラストを見て発音できるか挑戦する姿が見られた。それぞれの児童は、自分ができることは何か、できないことは何かを自覚して練習を進めた。

また、発表するための英語表現を考える際に、単語が分からなかった児童gは、指導者に「自由の女神はどのように言うのですか」と尋ねた。指導者は、ALTに児童の分からない単語を伝え、ALTはその児童の端末に発音を録音した(図14)。その後児童は、録音された音声を繰り返し練習し、発表の時には、自分の言葉として発表することができた。

指導者が、ALTのネイティブ・スピーカーの発音を生かすなどしてICTを効果的に活用することで、児童自身が自分に応じた「個別最適な学び」を実現することができた。

イ 相互評価をして学び合う「協働的な学び」

単元の後期段階では、1人1台端末を用いて自分の発表を録画し、録画した動画を自分で確認した。その後、発表に向けて改善の新たな視点を得るために、必要に応じてグループ内の友達と相互評価を行った。おすすめの国としてアメリカについて発表しようと考えていた児童hは、1人1台端末で写真やイラストを用いてスライドを作成して発表を録画した。そして、その動画をグループ内の友達と一緒に視聴した。おすすめの理由をすべて「It's nice.」と言っていた児童h

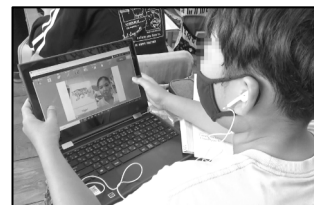


図12 スライドをスワイプして単語練習をする児童e

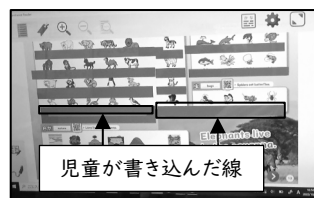


図13 書き込み機能を活用して単語を隠す工夫



図14 必要な単語を児童の1人1台端末に録音するALT

は、友達に「beautifulとかdeliciousとかいろんな言い方を使った方がいいよ」とアドバイスをもらって発表の内容を修正した。授業後、「友達のアドバイスは、自分の発表をよくするためにとてもよかった」と振り返った。

児童 i は、単元の中心となる言語活動に向けて自分の発表の動画を確認し、相手を意識した発表を目指して、友達に発表の聞き手になってもらった(図15)。そこで相手から「want」の発音が違っていることを指摘してもらい、音声面での修正を行った。児童 i は、「自分では動画を見返しても気が付かなかったけれど、友達が発音を教えてくれたので間違いに気付いて、本番の発表では正しく発音することができた」と振り返った。



図15 相手を意識して発表する児童 i

これらのことから、ICTの効果的な活用により、「協働的な学び」につながる言語活動となった。

(3) 単元の中心となる言語活動に向けて、自分の思いを伝えるために試行錯誤する姿

ア 自らの課題解決に向けて取り組む姿(「What do you want to study?」第5学年)

本単元では、「自分のことを伝えたり、相手のことをよく知ったりするために、学びたい教科やなりたい職業について伝え合おう」という単元の中心となる言語活動を設定した。

児童 j は、なりたい職業であるサッカー選手について伝えるために、総合的な学習の時間を学びたい教科に入れようと考えていた。しかし、教科書で扱われている教科に関する単語の中に総合的な学習の時間は示されていないため、児童 j は、授業開始前に



図16 1人1台端末に単語の発音を録音する児童

総合的な学習の時間の単語の発音をALTに尋ね、ALTは「integrated studies」と発音することを児童に伝えた。「integrated studies」と何度か発音した児童 j は、その後も「難しいな」と言いながら授業開始に向けて自席に着こうとした。そこで、ALTは単語が書かれた時間割のカードを児童 j に手渡した。児童 j は、カードを手掛かりに、1人1台端末の録音機能を活用して「integrated studies」と録音した(図16)。その後児童 j は、授業が始まるまで録音した単語の発音を繰り返し聞いた。後に行われた単元の中心となる言語活動では、「I want to study integrated studies, Japanese, P.E., P.E., arts and crafts, and arts and crafts.」と1日の学びたい教科の時間割について、ペアの友達とやり取りをすることができた。

自分の言える単語だけで話そうと諦めるのではなく、自分の本当の思いを伝えるために、自らの課題を解決する方法を考え、試行錯誤しながら主体的に取り組む姿が見られた。

イ 自ら考えた方法で単元の目標に向けて学習を進める姿(「We all live on the Earth.」第6学年)

本単元では、「食物連鎖について考え、『6年〇組フードチェーンデジタル図鑑』を作って友達に紹介しよう」という単元の中心となる言語活動を設定した。

児童 k は、デジタル図鑑として発表する生き物にカメを選んだ。第1時で単元の中心となる言語活動のモデルが示されていたため、第4時では、児童 k は食物連鎖についてカメや魚などのイラストを準備してスライド作成に臨んだ。また、食物連鎖についてどのように発表するかを考えたメモも作成していた。イラストを1人1台端末で写真に撮って発表スライドに生かし、さらに必要な情報をスライドに加えていた。第7時のデジタル図鑑の撮影時(図17)には、オリジナルのイラストを用いたスライドを使用

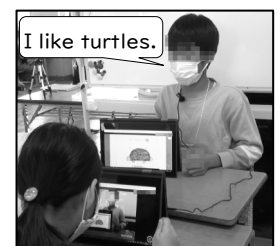


図17 オリジナルのイラストで発表する児童 k

し、自分の伝えたい内容を明確にして発表することができた。児童1は、第4時で、1人1台端末を活用してモデル動画を何度も見ながら発表に向けてスライド作成に取り組んだ。授業後、児童1は「僕には、発表するときの英語の順番が難しいので、ALTの先生の話し方が繰り返し聞けるのはとても嬉しいし、役に立つ」と話していた。

指導者が、導入で単元の中心となる言語活動を具体的に示すことで、児童は単元で目指す姿を明確にし、単元の目標に向けて自ら考えた方法で、学習を進めた。

(4) 「英語マスターシート」の活用により、英語に慣れ親しむ児童の姿

指導者は、該当単元または既習単元の内容に合わせて作成した「英語マスターシート」を単元の第1時で児童に配付し、単元の学習が終了するまでに自主的に英語の学習に取り組むよう促した。児童が日常的に活用できるように、「英語マスターシート」を日頃使用している自主学習ノートに挟み込んで使用した。指導者は、日々の児童の取組の見取りを各学級担任にも依頼した。第5学年児童mが記入したUnit5の「英語マスターシート」を図18に示す。

第6学年児童nは、Unit5の「英語マスターシート」に示されている「What's your favorite animal?」を使って、授業後に専科指導教員とやり取りをした(図19)。児童にとって専科指導教員と接することができる時間は限られていることもあり、英語を使って主体的に関わろうとする姿が見られた。

児童oは「英語マスターシート」に示されている教科書の該当ページを確認し、学習者用デジタル教科書を活用して単語を発音したり、歌やチャンツを聞いて歌ったりした。内容をチェックしながらビンゴ形式の項目を進め(図20)、主体的に英語に慣れ親しむ姿が見られた。第5学年児童pは、短時間学習で該当単元の言語材料である「Where is ~?」の表現が出てくる絵本を読んだ。単元の中で繰り返し聞いている表現を音声から文字へつなげながら英語に親しむ姿が見られた(図21)。

これらのことから、児童が、「英語マスターシート」を活用することで、自分の学習の状況に応じて問題を選択し、英語に慣れ親しむ機会を増やすことができ、学習を調整する姿につながった。

自分の名前を英語で書こう! [Blank] [✓]	P.D.の「位置」を読もう! [✓]	お母さんの「When is your birthday?」と聞こう。 6月11日 [✓]
Let's sing!を歌おう。 [✓]	P.D.の「位置」から1つ選んで書こう! under [✓]	友達に「What do you want for your town?」と聞こう。(場面: zoo) [✓]
byの図がどれか選ぼう! [Blank] [✓]	うらのQRコードを使ってどれか1つ聞こう。 [✓]	道案内するときエ夫したいことを書こう! 聞きたい道案内したい。 [✓]

図18 児童mが記入した「英語マスターシート」(一部)



図19 「英語マスターシート」を使ってやり取りをする児童nと専科指導教員

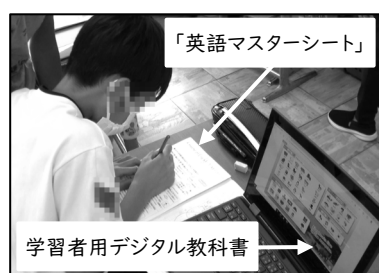


図20 学習者用デジタル教科書で単語の発音を確認する児童o



図21 短時間学習で絵本を読む児童p

3 児童の学びの変容

(1) 児童の姿から

第5学年Unit5「Where is the post office?」の単元の中心となる言語活動をパフォーマンス評価として見取った際の児童のやり取りの様子を例として示す。

児童 q と児童 r のやり取り (図22) では、児童 r の返事に対して児童 q は繰り返し (図22の①) や、質問 (図22の②) を会話の中で自然に行っている。また、児童 q の質問に対し児童 r は既習の英語表現を活用して自分の気持ちを伝え (図22の③)、児童 q はそれに応答している (図22の④)。このような表現を児童がやり取りの中で活用できるのは、指導者とALT が日頃からやり取りの際に意識的に英語表現を使用していることが起因していると考えられる。児童からは、Unit 5 の言語活動の中で「『少し先に行ったところ』はどのように言うのですか」という質問があり、指導者やALTからは「Go straight for just a little bit.」という表現が示されていた。単元

児童 q What do you want for your town?
 児童 r I want a monster monument.*
 児童 q Monster ...?
 児童 r Monster monument*
 児童 q Monster monument?* ①
 Why? ②
 児童 r I like monster.* ③
 児童 q Wow! ④
 Where is the monster monument?*

 児童 r We are here.
 Go straight for six blocks.
 Turn left.
 Go straight for three blocks.
 Back for just a little bit.* ⑤
 You can see it on your left.
 児童 q This?
 児童 r Yes, that's right.
 児童 q Thank you.
 児童 r You're welcome.

図22 児童 q と児童 r のやり取り
 (*は誤用を含む)

の中心となる言語活動の場面で、この表現やこの一部を使って情報を伝えようとしている児童が多数見られた。さらに、児童 r はこの表現から「少し手前」という英語表現 (図22の⑤) を活用する姿も見られた。これらのことから、児童は、習得した知識や技能を言語活動の中で活用し、思考力、判断力、表現力等を高めることができたと考えられる。

実証授業後の第5学年、第6学年の児童の振り返りの記述を図23に示す。授業において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとするだけでなく、継続して主体的に外国語習得に取り組み、コミュニケーションを図ろうとする態度が養われたと考えられる。

・Unit5の未来マップで、僕があつたらいいなと思う建物まで正しく道案内をして、建物の場所を伝えることができた。もしも、外国の人に道案内をしてほしいと言われても大丈夫なように、もっとすらすら言えるように練習したい。(第5学年児童)
 ・発表のスピーチで、最初の方はとても緊張して言い間違いをして、何度も振り直しをした。3回目で言い間違いをしているかもしれないけれど、この単元で一番いいスピーチが撮れたと思うので、これからスピーチの練習を重ねていって将来役に立てたい。(第6学年児童)

図23 児童の振り返り (一部) (下線は筆者)

(2) 児童の意識調査から

研究協力校の児童を対象に、研究の始期と終期に質問紙調査を実施した。

言語活動に関する設問「外国語(英語)の授業では、外国語(英語)を使って、相手に自分の気持ちや考えを伝えている」で、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した児童の割合は、74%から83%に増加した (図24)。これは、指導者が目的や場面、状況等が明確な単元

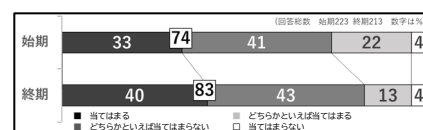


図24 言語活動に関する設問の結果

の中心となる言語活動を設定したことで、児童が学んだ英語表現を使って自分の思いや考えを伝える言語活動が充実したことが起因していると考えられる。

学習の調整に関する設問「外国語(英語)の授業では、めあてや課題解決に向けて、自分の学習の内容を考えている」で、「当てはまる」と強く肯定した児童の割合には変化が見られないが、「どちらかといえば当てはまる」と肯定した児童の割合は15%増加している (図25)。実証授業の中で、児童が学習方法を選択できる場を設定したり、単元で目指す姿に向けて試行錯誤する場面を設定したりしたことにより、児童が目指す姿に向けて学習を調整することができた。



図25 学習の調整に関する設問の結果

ICTに関する設問「外国語(英語)の授業で、1人1台端末(タブレットなど)は役に立つと思う」で、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した児童は、実証授業前から86%と高い割合を示していたが、実証授業後には98%にまで増加し、「当てはまらない」と強く否定する児童の割合は0%となった (図26)。

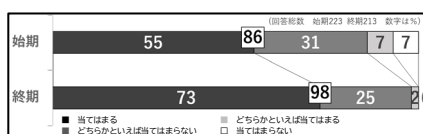


図26 ICTに関する設問の結果

ICTに関する設問「『外国語(英語)の授業で、1人1台端末(タブレットなど)は役に立つと思う』で、あなたがそう思った理由をくわしく書いてください」の回答結果を図27に示す。調査では、1人1台端末を活用することで自らの学習の状況が分かり、学習をよりよくするために有効であると回答した児童が多く見られた。また、自分が学びたい時に必要に応じて活用できるといった「個別最適な学び」や、録画した動画を用いることで友達と互いに学び合うことができる「協働的な学び」の視点からの記述も見られ、児童が学習を調整する言語活動の充実につながった。ICTの活用は、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成するために、有効であるといえる。

・タブレットを使うと、英語でちゃんとできているか、どこを間違えているかが分かるから。
 ・タブレットで自分と友達の会話を撮ってそれを見返すことができるので、自分がどのように会話をしているのかが詳しく分かるから。
 ・練習のときにタブレットで動画を撮ってもらって、失敗したところを練習することができるから。
 ・録画して、自分の言った言葉を聞いて、改善点などにいろいろ気付いて、どこをどうすればいいか分かるから。
 ・画面共有などで自分の意見をはっきり言えるし、「こうすればもっとよくなるんじゃない?」とアドバイスを言うことができる。
 ・他の人の動画やスピーチが分かり、参考になるから。
 ・単元のゴールの動画を見て、自分で練習ができるから。
 ・デジタル教科書が、単語の練習に役立つから。
 ・英語の時間に使う資料を送ってもらったら、そのままタブレットに残しておいて一人でも練習できるから。

図27 ICTに関する設問(自由記述)の結果(一部)(下線は筆者)

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 指導者が、バックワード・デザインによる単元構想を行い、ICTを効果的に活用することで、児童が、自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する言語活動の充実が図られた。
- (2) 「CAN-DOリスト」やモデル動画付きループリックを活用することで、児童が「何ができるようになるか」を意識して主体的に学ぶことにつながり、児童一人ひとりのコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力が育成された。
- (3) 「英語マスターシート」を活用することで、児童が英語に慣れ親しむ機会の増加につながり、主体的な学びを促進することができた。

2 今後の課題

- (1) 指導者が設定した単元の中心となる言語活動に向けての各時間の言語活動で、教科書や学習者用デジタル教科書の内容をどのように効果的に結び付けて指導していくのか検討する必要がある。
- (2) 1人1台端末を家庭学習でどう活用していくか、ICTのさらなる活用について検討が必要である。

文

献

- 1) 文部科学省「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」、平成29年(2017年)
 - 2) 文部科学省中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」、令和3年(2021年)
 - 3) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編」、平成30年(2018年)
- 滋賀県教育委員会「『CAN-DOリスト』リーフレット」、令和4年(2022年)

トータルアドバイザー

国立大学法人滋賀大学教育学部教授 大嶋 秀樹

専門委員

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課指導主事 平山 美穂

研究委員

彦根市立佐和山小学校教諭 上阪 奈麻

近江八幡市立八幡小学校教諭 河添 愛

研究協力校

彦根市立佐和山小学校

近江八幡市立八幡小学校